



かたはSP学生Office

教師を目指す学生による「学生文化」「学校文化」の創造と  
新たな「学生と学校のWin-Winの関係」の構築

かたはSP通信

と  
ツムぐ学生

第9号

2017年4月17日

編集 濱寫和也  
(片葩小SP担当)

2017年4月17日(月)

今日も久田さん、西藤さんが来てくれました。私は教室で授業をしている中なので、あまり見ることができずにすみませんでした。でも、その中で少しでも見ていたところを、短く書かせてもらいます。

私が3時間目に運動場で体育をやっていたところ、1年生の下校指導を2人のSPが手伝っている様子が見えました。周りには、1年生の保護者がついて来ています。そんな中で、入学してのざわざわした1年生を整列させたり、指示を入れたりすることは、なかなか難しいことです。1年生の先生方が一生懸命大きな声で子どもたちを並ばせていました。2人ならどのように、指導しますか？

この場合、「どんな言葉がけが大切なのか」と「どんな指導方法が大切なのか」のどちらを考えることが重要だと思いますか。自分なら後者を大切にします。なぜなら、1年生はまず聞く姿勢、いわゆる指示を聞くモードに入れていません。なので、ここでは「1年生をいかに自分に引きつけるのか」を考え、興味をもたせて聞いてくれる姿勢を作らせるのが大切だと思うのです。

大きな声は聞こえそうで、なかなか聞こえないものです。そこで笛を使ってもいいのですが、手をたたくという方法がかなり効果的のようです。最初は、「パン・パン・パン」、次は「パン・パパ・パン」など、リズムを変えて手を叩き始めるだけで、子どもたちは「何が始まったんだろう」と気付き、「何人かがまねして叩き始めます」。そうすると次はどんなリズムがくるのかな？と子どもが自然と静かに聞く姿勢を取るようになります。こうすることで、教員も子どもも互いが気持ちよく活動に入ることができます。よかったらどこかの場面で、使ってみてください。

考えていく上で、子どもを静かにさせるのではなく、どうやったらこの子たちは話を聞きたくなるのか？ということを考えておくと、指導がスムーズにできるようになると思います。

【追伸】元4年生の子どもたちも、今、一生懸命に、落ち着いて学習へ取り組んでいます。昨年、クラスづくりに尽力して下さった竹内先生をはじめ、宝木先生、SPさんのおかげです。

